

〒183-0034 東京都府中市住吉町 4-47-16

Tel/Fax 042-354-3044

E-Mail fuchu_nakagawara_church@hotmail.com

HP <https://www.fuchu-nakagawara-church.com>

牧会書簡／小会だより／

礼拝式文・説教／日々の祈り

2020年4月26日（第五報）

今週も、牧会書簡等をお届けします。家庭礼拝や、祈りの手引きとしてお用いください。礼拝説教は、5月31日のペンテコステまで連続して「復活と聖霊降臨」を主題にします。ここに、その日までのすべての説教原稿を合わせてお届けしています（実際には、これをもとに、週ごとに区切りをつけて語ります）。復活日と聖霊降臨日との間の日々を、希望のうちに歩みたいと願いつつ。とくに教会のため、群れが置かれた地域のためにも、祈りを合わせてくださると幸いです。

目次

目次

牧会書簡（５）敬愛する皆さまへ～フードパントリー報告を兼ねて	1
小会だより～第２回臨時小会報告	3
礼拝式文+説教「主の霊と命に結ばれて共に歌う」（４月２６日～５月３１日）	4
日々の祈り「食前の感謝の祈り」	23

牧会書簡（５）

敬愛する皆さまへ

～フードパントリー「おすそわけの会」のご報告。地域の方々と共に生きる教会でありたいと願いつつ

主の御名を讃美いたします。

4月19日（日）に府中中河原教会を会場に行われた、「こどもの居場所づくり@府中」のスタッフの方々によるフードパントリーが、無事に行われました。お祈りとお支えに心から感謝いたします。ご報告のため、いつもの牧会書簡にかえて、会の翌日代表の南澤かおりさんからいただいたメッセージと、対する私の返答を、転載させていただきます。同団体の活動のため、また地域に開かれた教会の奉仕のため、引き続きお祈りくださると幸いです。以下、引用です。

「おはようございます。昨日〔19日〕はありがとうございました。おかげで中河原はお二人キャンセルの方がいましたが、ほか18名の方に食材をお渡しすることができました。住吉、南町には必要のある方がたくさんいるのだと思いますがなかなかアクセスできない地域でした。今回、中河原で開催させていただけたことは、アプローチのきっかけになったと思います。この大変な状況の中、会場提供のお話は本当にありがたかったです。信者の皆様の大切な場所をお借りしたことに感謝いたします。皆様にどうぞよろしくお伝えください。」

以下は、私からお送りした返信メッセージです。

「メッセージを嬉しく拝受しました。地域のためのお働きを担ってくださっていることを改めて有り難く思うとともに、特に暗くなりがちなこの時勢にあって、灯火をともしように明るく働いておられる姿に励まされ、感謝いたします。」

牧会書簡（５）

どうか、スタッフの皆さまにも感謝をお伝えください。もっと私もお手伝いしてお話などもしたかったのですが、ソーシャル・ディスタンスを守るため、極力離れておりました。それでも、離れた牧師室まで、物資を受け取った方の嬉しそうな声が聞こえ、元気を分けていただけていました。ありがとうございました。

ところで、受け取ってはいけないと思いながら、差し出された領収書にサインしつつ、会場費 3000 円を「おあずかり」いたしました。いったんお受けしてしまいましたが、なんらかの形で、いずれまた還元したいと考えています。教会にまでご配慮くださったことにも、心から御礼申し上げます。

今回、これからは繋がるきっかけを作ることができ、教会の今後のためにも良かったと考えています。私たちの会議〔小会〕でも全会一致で関わらせていただけたことは、これまでの長い関わりの中で貴団体と深めた信頼の表れであり、公的な手続きをもってそれが確認ができたことも今回の収穫です。困ったときに誰とその状況を共有して共にいられるかを知っていることの重要性を思います。教会が、ご一緒にこの事態に向き合い、地域のためにお仕えしたいと公的に表明したとお考えくださり、必要に応じていつでもまたお声かけください。今後ともよろしく願いいたします。

みなさまくれぐれもご自愛くださいますように。不安の中にあることもたちが地域社会から疎外されず、むしろその真ん中に居場所を見つけて笑顔になることが、地域の喜びとなると信じます。そのために労しておられる皆様に、祝福と平安をお祈り申し上げます。」

以上です。同封の「小会だより」にありますように、5月もしばらく対面礼拝の休止措置を続けざるをえませんが、皆様の顔を毎日思い浮かべながら祈っています。私たちの避けどころなる主の平安がありますように！

2020年4月23日 府中中河原教会 牧師 大石周平

小会だより ～第2回臨時小会報告

— 4月19日（日）午前11時30分から、2020年度第2回臨時小会（スカイプ利用によるオンライン会議）が開かれました。以下のとおり、ご報告いたします。

【決議事項】

1. 4月19日（日）午後1時から4時に予定されているフードパントリーのための、教会建物使用の件：書記報告および牧師報告（内容は前回の「小会だより」にお知らせしたとおり）を承認したうえで、表題の件を全会一致で決議。

2. 「教会活動のための外出自粛」を継続して会員に要請する件：引き続き、5月24日までの「教会活動のための外出自粛」を、小会だよりをとおして会員に呼びかける。

3. 公的に開かれた主日礼拝の休止を継続する件：引き続き、5月24日までの公的な主日礼拝を休止する。その間の教会堂での礼拝は牧師家族のみで行い、同礼拝の式文・説教を文書と動画で公開する。

4. 公的に開かれた祈祷会の休止を継続する件：引き続き、5月21日までの祈祷会を休止する。その間の祈りの手引きとして、長老が「日々の祈り」の配信を継続する。

5. 第5回定期小会をオンライン会議として開催する件：5月3日（日）午前11時30分から第5回定期小会を、スカイプを利用して行う。

6. 第3回臨時小会をオンライン会議として開催する件：6月の礼拝等について話し合うため、5月24日（日）午前11時30分から第3回臨時小会を、スカイプを利用して行う。

—以上。5月31日ペンテコステ（聖霊降臨主日）礼拝で皆様とお会いできるか否かは、同24日の臨時小会で諮ります。引き続き主に委ねて祈りを重ねたいと存じます。

礼拝式文・説教「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

※ここに、4月26日（日）～5月31日（日）【予定】の礼拝式文・説教原稿をお届けします（聖書朗読箇所は毎週かわります）。それぞれ午前10時半から、私たちの命の主を仰ぎ、御名を崇めましょう。前回、「詩編42～43」連続講解説教が予定より早くおわりました。今回と次回は、「連続講解説教」の形をとらず、すこし自由に、「詩編16」のみことばを「使徒言行録2章」やその他の「聖霊と命」に関する箇所と共に聴きたいと思います（『聖書 新共同訳』（聖書協会1987）および、説教者の私訳を使用）。以前、詩編16編をうたえる形に翻案した際、同じ主題の説教を、スイスの日本人教会や府中中河原伝道所（当時）でもおこなったことがあります。ここでも、当時の説教が土台となったことを、主にある交わりに感謝しつつ、注記させていただきます。

小会では、5月の聖霊降臨主日（ペンテコステ）礼拝直前までの礼拝休止を決議せざるをえませんでした。今日から、復活の喜びもそのままに、聖霊の導きを求めていよいよ祈りたいと存じます。そのための手引きとして、私たちを主にあって結び合わせる確かなみことばが与えられるように願いつつ説教を準備いたしました。一回では語りきれない説教原稿となり、二週分をあらかじめまとめてお届けすることにいたしました（牧会書簡や日々の祈りは、来週またお送りします）。なお、実際に語る説教は、もう少し自由にかみ砕いたものとなります。礼拝後、できるだけ早く礼拝動画の配信もいたしますので、教会ホームページ上で更新される「最新のお知らせ」をご確認ください。心を高くあげ、今ここに語りかけてくださる主にむかい、御力に委ねて新しい一週に歩み出しましょう。〔牧師 大石周平〕

招詞 旧約聖書詩編124編8節

——主の御前に心をしずめ、みことばに聞くことからこの一週をはじめましょう。

「わたしたちの助けは

天地を造られた主の御名にある。」 アーメン。

讃詠 546

——ご一緒に、讃詠546番（『讃美歌』1954年版）を歌い、主の御名をたたえましょう。

「聖なるかな……昔いまし今いまし、とわにいます主をたたえん。アーメン。」

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

祈祷 罪の告白と赦し／聖霊の照明を求める祈り

——全能の神の御前に、私たちの罪を告白し、赦しを求めて祈りましょう。

「全能の父なる神よ、あなたの御前に明けない夜はなく、私たちは今日もあなたの命の光に照らされて、御名をたたえる朝を迎えました。いま、愛する兄弟姉妹と共に、同じ時に、ひとつのみことばに聴き、祈りをささげる機会を与えてくださることを、感謝いたします。どうか、あなたが親しくこの祈りの共同体の只中にお臨みくださり、聖霊をもって一人ひとりの心を照らし、あなたの義と愛と真とによって満たしてくださいますように。

主よ、わたしたちは、あなたの助けを求めて祈ります。今・ここに、いっそうの不安に揺れる私たちに、語りかけてください。罪のこの世にあって、また、この身にあって、わたしたちは、あなたの御心に反する方向に決定的に傾いており、あなたの命の御言葉によって新たに生きることがないならば、死の陰の谷に転がり落ちてしまうような者たちです。過ぐる一週の歩みの中で重ねてしまった罪を思っても、私たちはあなたの御前に恥じ入り、あなたの一方的な恵みにすがって、赦しを祈り求めるほかありません。私たちは、あなたの招きにもかかわらず、あなた以外の諸力に従い、襲い来る見えない不安に支配されて生きていました。みことばに聴かず、祈ること少なく、ただ自分の思いによって歩み、主なるあなたと隣人へのひたむきな愛に生きることをしなかったのです。

主よ、私たちは今こそ、ここに、十字架と復活の御業を果たして下さった主をおおぎ、悔いし砕けし心をもって、御前に罪を告白いたします。どうか私たちに憐れみ、赦し、癒してください。どうか私たちをあなたのもとに共に立ち帰らせてください。まことにあなたは、罪びとを招き、失われた者を探し求めて、ついには見出してくださるお方です。御子イエス・キリストをお遣わしになるほどに、世を愛して下さったお方です。御子は十字架上で、あなたの憐れみにみちた救いの御計画を、成し遂げて下さいました。どうか今、御子の十字架の血によって私たちの罪を拭い去り、汚れを洗い清めてください。復活の喜びをもって私たちを満ちし、御霊を注いで私たちを聖別し、全世界にいるあなたの子らと共に、感謝をもって御名をほめ讃え、礼拝する者としてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。」

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

聖書

——聖書に記された神のみことばに聴きましょう。旧約聖書詩編 16 編 8～11 節です（週ごとに、新約聖書ローマの信徒への手紙 7 章や、使徒言行録 2 章などとあわせて読みます）。

「わたしは主に相對しています。主は右にいまし／わたしは揺らぐことはありません。わたしの心は喜び、魂は踊ります。からだは安心して憩います。あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなくあなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず／命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い、右の御手から永遠の喜びをいただきます。」（アーメン）

説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う（全六回分の説教原稿）」

キリストの体に結ばれて～ロマ 7

皆さまと離ればなれの地でイースターをお祝いしていた先日、以前礼拝でご一緒に読んだローマの信徒への手紙 7 章 4 節のみことばを思い出しました。

「ところで兄弟たち、あなたがたも、キリストの体に結ばれて、律法に対しては死んだ者となっています。それは、あなたがたが、他の方、つまり、死者の中から復活させられた方のものとなり、こうして、わたしたちが神に対して実を結ぶようになるためなのです」。

パウロが、「キリストの復活の体」と結ばれている私たちは、キリストとひとつであるゆえに、兄弟姉妹とも結ばれていることを教えてくれたことを思い出すのです。実際には顔を合わせたことのない人たちもいたローマの地に手紙を送ったパウロは、かの地の人々を顔を合わせることを本当に心待ちにしていました。実際にお会いして、復活の喜びを分かち合いたい、そのような思いであれば、今の私たちも具体的に共有しています。心おどる、というだけでは足りない、もっと血わき肉躍る、というのでしょうか、具体的に身体的である喜びを、私たちは礼拝で共有するように、招かれているのだと思います。「体の復活」を信じることができる人は幸いです。その人は、不条理によって愛する者たちと引き裂かれ、会うことができない現状があっても、これで終わりでないことを知っているからです。私たちは、何があっても体をもって、顔を合わせて共に礼拝します。この間入院した方々の

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

ことなども思い起こしながらこの希望を確認できたイースターの日、みなさんとまたお会いする日が、いよいよ楽しみになりました。私たちの教会の小会は、ペンテコステの直前までは礼拝休止措置を継続することを決めざるをえませんでした。聖霊降臨日には燃える心と軽やかな足取りをもってごいっしょに集まることができるでしょうか。正直私には分かりませんが、いずれにしても、聖霊による照明を求め、共に主に結ばれた者たちとして礼拝する希望に立って、この期間を過ごしたいと思うものです。

キリストの霊に結ばれて～使徒 2 における「霊」＝「風」／「息・魂」＝「喉」

さて、復活から聖霊降臨日へ向かう途上にあって、しかも身体的には皆さんと離れた地で、しかし具体的な命に結ばれる希望があるのだ、と申し上げました。この文脈で、わたしたちが霊的に結ばれている、ということ、体をもった集会の中で具体的に結ばれている、ということとの関係について、確認しておきたいと思います。端的に結論からもうしあげるなら、霊的に結ばれていて、体は引き離されたままではおられない。霊と体が分離してしまうような形で、教会とか礼拝ということ語ることはできない、ということです。聖書は、復活について証言したうえで、その出来事と引き離しては考えられない聖霊降臨について語りました。復活の命に結ばれることと、主が送ってくださる霊において結ばれることは、切り離せない。そのことを確認するために、ちょっと先取りになりますが、使徒言行録 2 章を読んでおきましょう。

その日、イエスの約束に基づいて祈る信仰者に、激しい風が吹くような天来の音と共に、炎のような舌があらわれ留まると、彼らは聖霊に満たされた、とあります。これは科学の言葉ではなく、伝承された詩とか信仰の文学の言葉ですから、その線で解釈することが必要です。ヘブライ語の「ルアッハ」、「風」という単語は、もともと、霊という意味を同時に持っています。また、日本語でも「いきもの」と「息」という言葉は古くから関係があるように、ヘブライ語でも「息」を意味する「ネフェシュ」は「喉」という原意のある言葉ですが、「魂」という意味にも取ることができ、それは、人間のイキイキとした「生」全体のことも意味します。

なにかごちゃごちゃと言葉の説明をしているようですが、ここで申し上げたいことは、聖書の言葉づかいからも、霊と肉と魂とが分離されてはいないということです。体の復活と、

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

霊による新しい命とについて聖書の用いるイメージは、しばしば霊的な用語を退けて、客観的・物理的に観察可能な現象としてのみ事柄を分析する科学の言葉づかいとは違うということが分かります。現代人の先入観から古代の文献を読むのではなく、まずは聖書の語る体と霊、その人間論をわたしたちがしっかり受け止める必要があります。

ひとつの言霊（ことだま）に結ばれて～使徒 2 における ことばの一致

さて、ペンテコステの出来事です。主の口の息が、風となり人に吹き付け、鼻から熱い霊の言葉が一端喉をとおって胸に入り魂と共に体を熱すると、肺から気管、つまりもう一度喉をとおって、舌を燃やし、口からゴジラか何かのように燃える炎の言葉の風が吹き出します。中でも使徒ペトロはのけぞって雄弁に語りだしました。使徒言行録 2 章には、引き続きこの使徒の説教が記されています。そこでわかることは、イエスの死後、弟子たちが、どうも聖書研究をしていたということ、聖書の言葉を深く学ぶなかで、イエスの十字架の意味と彼らがついに会った主の復活の意味を理解し始めていたことです。『ヨエル書』や『詩篇』を例にして、聖書は、人々が十字架に付け、神が死者の中から復活させたイエス・キリストを証していたのだ、と、ペトロは特に同胞に、力強く大胆に主張し始めたのです。パウロもまた後に使徒となって、同じことを特に異邦人に向けて伝道しましたが、彼などはもともと、当時の理性ともいべき人でした。簡単に復活など肯定するはずのなかった当代随一の律法学者の弟子が、とつぜん復活について語りだしたのでした。こうしてペンテコステの聖霊は、宣教する教会、伝道する教会を生み出し、世界にまでその不思議な力を広げていったのです。

古代の伝説にも似た言葉づかいで、大胆さに綴られるペンテコステ伝承は、天下のあらゆる国のリストを載せ、そこから集った一同が出来事に大変驚いたと伝えます。「**どうしてわたしたちは、めいめいが生れた故郷の言葉を聞くのだろう・・・彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは**」。同じ箇所を、わたしはスイスの日本人教会で説教したことがあります。そこでこの言葉は、こう響きました。「どうしてわたしたちは、欧州の地で、めいめいが生れた極東の国語で語られた説教を、ドイツ語と一緒に聞き、日本・スイス・ドイツの兄弟姉妹と一緒に歌い祈り礼拝できるのだろう」と。実際、わたしは、そのときペトロが説教した旧約聖書の箇所を説き明かすために、準備として、右から左に読む横文字（ヘブライ語）を、上から下に読む縦文字（日本語）に

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

し、それを左から右に読む横文字（ドイツ語）にする作業をしたのでした。複雑なこと！もとの意味がゆがまないはずはない、と恐れました。言葉が変われば、概念やイメージも変わるものです。ヘブライ語やギリシア語で書かれた聖書が、場所と時代を超えて、わたしたちに届いており、しかもその言葉でわたしたちが復活のイエスを信じている、そのこと自体恐ろしく不思議なことに思われたことでした。同時に、こういう経験もしました。ああ、礼拝は、どのような場所でどのような言葉を用いても、霊が留まる人々を、神の御業のただ一事に触れさせる力を持つのだなあ、と思わされる経験です。人の限界を超えて主の命と私たちを具体的に結ぶ出来事が、復活でした。その復活の体に結ばれた私たちの一致を信じさせる霊の働きについて、ペンテコステの出来事は伝えています。そして、その霊と体の一致を媒介する言霊、一つのみことばによる結び付きが、あらゆる隔たりをこえた体験として伝えられています。いま、私たちは、身体的には離れた場で、「いっしょに礼拝する」とはどういうことかと問われる中、教会の交わりとは、聖霊の風にふかれつつひとつの御言に生かされた心と、キリストの命に結ばれた体とが同時に触れあう場所に生まれるものだと確認されます。

バラバラことばと霊の炎～創世記 11 のバベルの塔の伝承から

もう少し聖書の豊かなイメージを借りることにしましょう。今日は、復活と聖霊降臨を常に結びつけながら考えてください。聖霊降臨は、旧約聖書創世記に記された、バベルの物語が象徴する言葉の混乱に対する、決定的な解決の出来事だったと解釈されているふしがあります。創世記 11 章の伝説めいた言い伝えをご存じでしょう。人は他国に轟く名声を得ようと天まで届く高い塔を建てようと建設事業に取り組んだのですが、その道半ばで神によって遮られます。通じていた言葉がバラバラになって通じなくなり、コミュニケーションが断たれてそれ以上の建設が不可能になってしまったのです。»バベル«の塔の崩壊と人々の離散が象徴するものは、人間の、とくにその言葉の»混乱«した状態でした。ヘブライ語で混乱は、バーラルというのです。バーベルのバーラル。聖書は言葉遊びもしています。バベル、バラバラ。アスファルトによる建築など、当時の最新技術をもって人間が自分の名を神にまで高めようと奮った結果受けたものが、この混乱、崩壊、離散というバラバラの状態をもたらす神の業だったのです。人は、他者と交わるために、大変な労と、たゆまぬ愛情にも似た果てしない熱心を持たなければなりません。時に、言

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

葉を尽くせば尽くすほど、人との距離が広がり、祈れば祈るほど、神が遠く感じるような苦しみに襲われる、多かれ少なかれわたしたちが経験するこの事実は、この語るころと多分一致しています。他者より自分の名を高めようと語られる言葉は、きっと、今この瞬間にも、あちこちでバベルの崩壊、混乱の現実を生んでしまっていることでしょう。

一方、聖霊降臨日は、散らされ混乱した人々を、言語の壁を超えて、一つの福音に聴き入らせる出来事でした。一つの知らせが、どういうわけか、言語とコミュニケーションの壁を超えてしまったのです。「いったい、これはどういうことなのか」。当時の人々と共に、わたしたちも驚き、何が起ったか、しばしば理解に苦しむことです。ただ、言えることは、ここで人々が経験していることが、境界線を超え人々にふれる福音の炎のような力強さであるとすれば、それは、わたしも経験したことがあるということです。言語の多様性は現実としてそのままなのに、福音の言葉は、みな「故郷の言葉」として親しさと、吸引力と、心をこがす熱とをもっています。この言葉を聞くと、わたしたちは、だれでも、古里に帰ったような安らぎを得ます。天国の前味を味わう経験、とある人が呼ぶものです。

ペンテコステの50と、モーセ五書（トーラー）にならった詩篇の5区分

さて、使徒言行録によれば、この日はユダヤ人の五旬祭でした。出エジプトを記念する過越祭から、五十日目の祝日です。それで、世界中から離散の民が再び都に集まっていたのです。ギリシア語で50を表す言葉から、「ペンテコステ」とも言われます。「五」はユダヤでは大切な、象徴的な数字です。聖書最初の、創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記は、伝統的に教え・律法・道という意味のヘブライ語で「トーラー」と呼ばれるまとまりを構成していますが、ご存知のとおり、これらの書を、モーセ五書という伝統もあります。

また、詩篇は、モーセ五書と対応する五区分をもって編集されています。どの区切りの終わりでも、頌栄が各まとまりの明白なしるしです。アーメンないしハレルヤを伴う頌栄は、詩篇41編、72編、89編、106編、150編の終わりにあります。たとえば、41編13節後半。「**主をたたえよ、イスラエルの神を/世々常しえに/アーメン、アーメン**」。72編19節。「**栄光に輝く御名を常しえに讃えよ/栄光は全知を満たす。アーメン、アーメン**」。すこし飛ばして最後、150編は6節です「**息あるものは**

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

こぞって 主を讚美せよ。ハレルヤ」。もはや、人間だけでなく、全ての被造物の讚美で終わる！これは、聖書の初めの章に通じる強烈な創めと終わりの神学です。

ことばの一致は讚美の一致～引き続き詩編から、わたしたちの生の目的としての頌栄

詩編の五区分について、説明調になりすぎたでしょうか。よい機会ですから、いま五区分の最後にあげた 150 編に、霊と体が切り離せないというお話に関連する、「息あるもの」という言葉がありますので、もう少しだけ言葉の説明を加えることをお許してください。詩篇 150 編 6 節の「**息あるもの（ネシャーマー-NESHAMAH）**」という表現です。これが聖書で最初に出てくる節といえば、創世記 2 章 7 節でした。「**主なる神は、土（アダマ）の塵でひと（アダム）を形づくり、その鼻に»命の息（NESCHAMAT HAYYIM）«を吹きいれられた。人はこうして»生きる者（NEFESCH HAYYAH）«となった**」。「生きる者」と訳されているところには、ネフェシュ・ハイヤーという表現があるのですが、魂と訳されるネフェシュの原意は、最初に申し上げた通り、「喉」です。喉（ネフェシュ）に、神の命の息（NESCHAMAT HAYYIM）を鼻から受けて初めて、人間は、いきもの、すなわち喉に命をえた、生きる魂の存在（NEFESCH HAYYAH）となるのです。

さあ、くどくどと言葉の説明をして、私は何をお伝えしようとしているのでしょうか。私はただ、みなさんに、ペンテコステの日に向かう日々にあって、体と切り離せない言霊のような具体的に熱いものに触れる希望を共有していただきたかったのです。復活の命を信じるためには、科学分析などではなく、霊と言葉の熱い命に触れる必要がある、ということをお伝えしたかったのです。

さて、生きることが息をすることに繋がるなら、新しく生きることと新しい思いで歌うことは密接につながるということになるでしょう。礼拝の最後に頌栄（アーメン）を歌うキリスト教の古い伝統があります。もちろん、さきほど申し上げたような、詩篇のより古い伝統を受け継いだものです。詩篇には、個人の詩も共同体の歌もあり、内容は嘆き・感謝・称え・願い・祈りなど、さまざまですが、いずれにしても、少なくとも詩篇編纂者や詩篇で祈る礼拝者たちにとっては、「**息あるものがこぞって**」なすべき、その生きる目的は、主なる神の栄光の讚美を歌うことなのです。人生の目的は何かと問われれば、わたしたちは、

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

「神を喜び (TO ENJOY GOD) 、その栄光をうたい、皆と共に味わうこと」だ、と応えま
す (ウエストminster小教理問答 1 を参照) 。

祈禱会では何度も申し上げていますが、「**栄光**」という言葉には、「重い」という原意が
あります。詩篇が記録するのは、神の重厚な輝きに照らされた人々が叫ぶ、歌と祈りな
のです。ですから、神の光の重さを知った者らが歌う頌栄の「**アーメン まことにそうです**」
との言葉、**ハレル・ヤー「讃えよ、主 (ヤー) を」**との声も、やはり、軽々しくはありませ
ん。それは、全人格全生涯をかけて叫ばれる、腹から出る声であり、それでいてずんと
した安心感に憩う心から捧げられる思いであり、知恵を尽くし力を尽くし、全身全霊全
部を伴う命の息であるはずです。

生きるにも、そして死ぬにも主を喜びとする～老シメオンとペトロの例から

老シメオンが赤子のイエスに出会った日、約束の成就に喜んで歌った歌は、頌栄では
ありませんが、少しこれににています。「**主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を
安らかに去らせてくださいます**」。これは彼の生涯最後の歌でした。宗教改革に携わっ
たばかりの二十代のジャン・カルヴァンが、シメオンの歌を礼拝式の一番最後において、
毎週歌おうとしたことは、興味深いことです。少なくとも彼にとって、礼拝とは、生ける主に
出会ったからには、今死んでもいいとさえ告白させる、あるいは、死さえ新しい命の前に
棘をうしなっていると告白させるほどの、生を決定づける神の栄光の出来事なのです。こ
こに、死を超える告白や歌があります。そして、これは、復活信仰に繋がる歌だと思いま
す。

主の霊に満たされたペトロが、使徒の書 2 章 2 5 節で、ダビデの詩を引用したとき
に発した声も、きっと、古代の詩人たちやシメオンの姿にも似た、生命を尽くしての喜びの
発露でした。使徒 2 章 2 5 節。

**「わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、わたし
は決して動揺しない。だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のう
ちに生きるであろう。…」**

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

心は楽しみ～使徒 2 から詩篇 1 6 へ

ペトロは、もともとヘブライ語で書かれた詩篇 1 6 編 8 節以下をギリシャ語訳で引用し、詩人ダビデがここで伝えるのはイエスの言葉だ、と大胆に解釈します。しかも、イエスと結ばれた彼自身の告白でもあるように、「**心の楽しみ、舌の喜び、体の希望**」を感じているのは明白です。ギリシャ語には、心は感情・精神の全体、体は肉体の全体を表すような響きがあります。舌は言葉と霊の器官で、いわば燃える言霊（ことだま）の座です。

ギリシャ語訳聖書は、翻訳である以上、ヘブライ語の言語世界と細やかな点で異なる点や違う印象があることは事実です。ここに、私のつたない翻訳ですが、1 6 編 9 節をもとにして、讃美歌 1 4 番の旋律に合わせてわたしが翻案した韻律詩編を紹介させていただきます。ヘブライ語のニュアンスを出そうといくらか苦心をしながら翻案しました。ヘブライ語では、いくらか肉体的な特徴が際立っていることに注目してくだされば幸いです。

4. われ祝(たと)う 主を、常(とこ)しなえに

夜(よ)ごと朝(あさ)ごと その諭(さと)しに

心臓(こころ)歓(よろこ)び 肝臓(はら)は踊(おど)り

肉(からだ)は安(やす)し 霊(われ)揺(ゆる)るがじ

カルヴァンは、詩篇は、「私たちの内面のあらゆる情動の鏡だ」とか、「魂のあらゆる部分の解剖図だ」と心を高揚させて言いました。わたしは、加えて詩篇 1 6 編は、肉体の具体的な解剖図も知っていると感じます。肉と霊は、やはり切り離せないのです。詩人にとって、肉体と臓器の各部にこそ、理性と知恵、感情の住まい、生活の動力があると考えられています。

「…**歓喜するべし わが心臓**

歓呼するべし わが肝臓（きも）は

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

おお、わが肉 安きに住むべし！」

ヘブライ語の LEB、「心臓」は、頭にも似て、理解や理性の住まいです。比して、日本語の心も、ドイツ語や英語の HERZ や HEART も、どちらかというと感情の座であるという性格が強く思われます。心ぐるしい、心もとない、心おどるとき、感情が胸のうちにあるという意識がわたしたちにあります。しかし、古代オリエントの人々にとり、心とは情ではなく、どちらかというと理性や理解の住まう部屋です。確かに、経験上でも、心臓音が乱れる例として思い浮かぶのは、理性に冷静さがなくときであり、事柄を把握しきれず揺らぐときです。もちろん、感情と理性は切っても切り離せない面があるのは事実ですが、それでも、強調点が少し違います。心ない・心冷たいとか HERZLOSIG というと、無情、薄情という意味に聞こえますが、古ヘブライ語では、神を畏怖する知恵に欠ける愚かさを意味します。ふた心という表現もヘブライ語にあります。その際、気持ちが二つに分かれる浮気心のことではなく、真実と偽りとを分裂させてしまって、それを意識しながら平気で思いと行動を分けていくというニュアンスがあります。そういった、第一義の違いは、間違いなく存在するのです。心を高くあげよ、と多くの教会の聖餐式で歌われていますが、これは感極まって歌えという意味では本来ありません。そこで行われている天の食卓を味わうとき、御言葉に基づき聖霊に知恵を得て、神を知り己を知る救いの確信をもって祈ることが求められているのです。

腹はおどり～引き続き詩編 16 から

では、オリエントの古代人にとって、感情はどこに住まいを持っていたのでしょうか。それは、第一に「はら」です。腹立った経験のある日本人なら、すぐに納得いくでしょう。わたしは、感情が乱れる日々には、しばしばお腹を壊しますから、理解できるように思います。苦しいときに裂ける思いがするのははらわたであり、逆に、嬉し楽しく笑う時に抱えるのも腹です。日本語では、はらわたに当たるのは「腸」ですが、ヘブライ語で、感情の座としての腹というとき、腎臓(KILJAH)や肝臓(KABED)という言葉が使われるのが一般的でした。特に、肝臓、カーバドという言葉は面白い言葉です。というのも、あの、カーバド、栄光という語と子音・語源が同じだからです。もちろん、肝臓は輝いたりしません。肝臓と栄光の共通点は、ただ「重い」という原意にのみあります。古代人は、たとえば牛の内臓について知識をもっていました。腹腔にある内臓のうち、長い腸以外では、一番大きく重い

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

ものだから、肝臓をカーベド、重いものと呼ぶようになったのです。1954年版讃美歌に掲載されている文語訳詩篇では、9節を「わが心は楽しみ、わが栄えは喜ぶ・・・」と訳しています。「栄え」という訳は、原語の思いがけぬ繋がりから来た誤解だったのです。

なお、ヘブライ語で心を LEB というとお話しましたが、これとドイツ語 LEBEN が関係するかはわかりません。たぶん、ドイツ語の LEBEN（生）は、LEIB（腹、肉）という言葉を通して、LEBER（肝）と繋がってゆく言葉でしょう。古いドイツ語の世界でも、肝臓は腹、肉体的な命の最も中心的な部位の一つであったということでしょうか。腹と命といえば、かつて武士たちは、裁きの文脈で、重大な過ちの償い・責任として、腹を切ること、ハラキリによって実際に命を絶って死んでゆきました。詩篇16編のヘブライ詩人は、その肉と感情の命の中心である腹を使い、肉を尽くして神に呼ばわり、腹式呼吸で歌うのです。

肉（からだ）は安し～詩編16を複式でうたう

ドイツ語の FLEISCH に最も近いのが、続く「肉（BASAL）」という言葉です。身体全体を意味します。詩人は、肉が安きに住むといいますが、これは、心安心・落ち着くという思いよりも先に、体が安全、肉体が危険に陥れることなく、安全に住むことができるという意味で使われています。約束の地での、神の守りの確かさの確信です。16編1節にあるように、かれは、神の懐に体を具体的に運び、避け入ってきたのです。彼は死ぬほどの危機にさらされて、こう歌っていました。

1. 神よ、われをば 守りたまえ

今ぞ御もとに 避けきたらば

君こそわが主 わがよろこび

主よ、主のほかにも 幸(さち)はあらし

2. 地に住む友よ、聖(きよ)き徒(と)らよ

主のほか誰れぞ 傷みを知る？

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

血を神々に？ 名を女神に？

尊（とおと）き子らよ、主のみ仰がん

3. 主はわが嗣業(ゆづり)、わが杯

君ぞ握れり わが籬(さだめ)を

わがため落つる 測り縄の

指すは麗し 御国の分（ぶん）

命の犠牲と地の嗣業～詩編 16 の読解

詩人は確信して他の人々に語ります。主は、他の神々に血を注ぐ儀式をし、他の神々の名を唇にのぼらせて心身魂を捧げる人々にでなく、主を避けどころとし、主に結ばれたものにこそ、嗣業、約束の地を分け与えるお方だと。血の犠牲をともなう儀式や、神の名を呼ぶこと自体が否定されているのでは多分ありません。問題は、その犠牲を誰にささげ、どの神の名を自分の命の道とするかです。たしかに現代人には、儀式としての動物の犠牲や、ましてや人間の犠牲は、受け入れがたいことです。しかし、血の犠牲がないなら、償いがあいまいなまま放っておかれるのでしょうか。彼を苦しめるものは、だれが取り去ってくれるのでしょうか。命を尽くさなければならぬほどの罪の償いの必要を覚えた時、何によってこれを解決できるでしょう。創世記によれば、赤い血(DAM)とは、赤い土(ADAMA)から生れた人間(ADAM)の命そのものに他なりません。詩人には、具体的に、命を脅かす敵対者とその社会、神々が目の前にありました。古代人たちは、血すなわち命の犠牲によって、罪の赦しを、神々に常に懇願して生きていました。では、唯一の主なる神を避けどころとしたものは、肉体の死、思いの死、感情の死、理性の死、魂の死、霊の死に直面したとき、どのようにしたら良いのでしょうか？死は今にもわたしたちを呑み込もうとしているのです。アブラハムを祖とする民は、子羊の血を裁断にふりかけました。ダビデ王は、血の変わりに水を使ったこともあります。イスラエルの主なる神は、この血や水の償いを受け入れられたのでしょうか。少なくとも、今の詩人には、その問題はど

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

う形かて解決をしているようです。そして10節でこういう歌を、おそらくは複式で力を振り絞ったうえで、喉から＝魂から、口にのぼらせるのです。

5. われ主を前に 常に歩まん

わが右の座に 神在(いま)さば

麗し 楽し 命の道

知らしめたもう 主よ、君こそ

関係の復活：死を克服し、約束に生きる新しい命のあり方へ～引き続き詩編16から

彼は、どういふ理由かわかりませんが、死を克服する信仰に立つことができています。新約聖書の記者なら、これを復活信仰を呼ぶでしょう。心と肝と肉の喜びは、死と墓穴への勝利に由来するといふのですから。彼の生涯は、血を流して死んで償い終わるものではなく、命の道をさらにその先に見出しています。苦しみの世界でも死者の国でもない、具体的に、測り縄とくじで自分のものと測定・決定された麗しい土地で、神の手から渡された杯に潤い、具体的な食卓や乳と蜜などの肉の楽しみも知る命の道です。なぜ、唯一の主にすぎることがこれだけの楽しみを保証するのは、説明されていません。ただ、彼は、心底、腹の奥、魂の深み、全人格から、それを確信し、それで、肉体を躍らせているのです。神は死を超えて生きた神である、その神の前に、わたしは共に歩いていく、それだけが、彼の永続する復活信仰に根拠を与えるものなのです。

ところで、肉と訳した BASAL は、肉体全体を意味しますが、体の部位としては、特に男性器だけを指すこともあります。肉体の中心部は、「前の肉」と呼ばれるそれでした。神と民との契約においては、男は、「前の肉」つまり生殖器の皮の部分を切り取ることが祝福のしるしとされました。祝福と命が増えることが結びついていたからかもしれません。それは、神の前に信実な民の一員であることの肉におけるしるしとなりました。契約の文脈で、「信実さ」とは、第一に、神に相対する具体的な生活における忠実さのことです。神をただ思う、思弁するだけでなく、仕え生きることを意味します。旧約の民はそのような信実の関係に生きることを神と約束し、契りを、契約を結びました。それは、預言者たち

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

によって、夫婦のような関係にたとえられてきた深い愛に根差した関係です。詩人にとって神奉仕と信仰生活は新婚生活のように楽しいものでした。そこには、信頼にたる約束があり誠実な交わりがあったからに他なりません。なお、神奉仕という、ドイツ語(GOTTESDIENS)に影響された表現をしました、これはまずは礼拝のことです。しかし、礼拝奉仕の忠実さは、人生全体の奉仕の忠実さの始まりです。パウロは、奴隷のように配偶者を縛る律法と結婚していたものがついにそのパートナーと死別して、新しい生活を主に結ばれて始めるという、ちょっとおどろくような比喻を用いて、復活の新しい人生について語っています。ふたたび（この説教シリーズの最初に引用しました！）ロマ書7章です。律法はもうイエスの十字架によって死んだのだから、律法違反のそしりから自由になって、復活者と契りを結びなさい。死に打ち克った神の子、主のものとなって、喜んで生き、流れのほとりの木が結ぶような豊かな実を結びなさい、とパウロは教えているのです。そのような「主との結婚生活」に、パウロが礼拝を考え、神讃美を歌いつつの具体的な日々を考えていたことは、その後に明白にされることです。

聖霊降臨日に覚える十字架と復活～ふたたび使徒2章へ

長くなりました。ペトロの文脈に戻りましょう。彼の舌が語った詩篇講解の大胆さは、神奉仕、契約への忠実さ、生の信実さというものが、他のだれでもなく、人間となられた神、イエス・キリストご自身のものだと言った点にあります。聖霊降臨日の弟子たちは、詩篇16編では書かれなかったこと、どのようにして、民による血の犠牲なくして、陰府からの救い、死からの解放が可能なのか、という問いに具体的な答えを語りだしたのです。いや、血の犠牲はなくなったのでない。血肉を取られた神の子の犠牲によって決定的に行われたのだ！その肉は裂かれ、血は流されたが、詩人が依り頼んだ神は、イエスを死に支配されたままになさらず、復活させられた。本当に神に心身魂をとおして信実であられた方の死と復活、そして、約束された天の国における神の右への着座、それ以外に、ダビデの詩が目指したものがあろうか！神の風に促され、その熱にまるで酒に酔ったかに見えるほど浸りきって語る使徒の確信は、復活の主との人格的な出会いを基礎としていました。イエスというお方なしに、彼らは詩篇を読むことができない、といえるほどです。

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

舌の喜びと、諸々の命の道～詩篇 16 とは異なる使徒 2 の強調点

さて、最後です。旧約と新約の語句の違いについて二点説明して終わらしましょう。使徒の書 2 章 26 節では、ヘブライ語で肝臓と書かれていたところが、舌となっています。この変更により、新約では、肉と臓器とそこに座をもつ人間性という地に足のついた古代オリエント的な人間観に加え、何か、もっと天に頭を突っ込んだ、霊的神秘的な風が吹いているように感じます。それは、ヨエルによる預言と結び付くことで強められる印象です。今や、ペトロには、終わりの日の確信が見えています。天の国の理想的な希望がいよいよ確かに思われているようです。彼にとって、命の道とは、この地上での生涯であると同時に、復活の希望と結び付いた永遠の命に至る天の道であると、ほのめかされています。ペトロは、わたしたちは死んでも生きる、体ごと復活して新しい国に生きることになる、と本気で信じていました。聖書を読めば読むほど、イエスが十字架上で死なれたことが、その信仰を保証するように思われたのです。

二つ目の旧・新約の小さな違いは、命の道という表現にあります。ヘブライ語では道は単数ですが、ギリシャ語では複数形なのです。理由はわかりません。命に至る道は一つである。わたしこそ道、真理、命である、と主はかつて言われました。しかし、同時に、道が主を信じる者らそれぞれの生涯に関わるものならば、複数の流れを経て一つの大河に流れ入る豊かな川のような道だとも考えられます。聖書内に既にそうであるように、一つの詩篇にも複数の本文、翻訳があり、歴史に多くの解釈があり、それ以上に、それに生きる人々の人生の多様性が存在するでしょう。もし、その多様さがかえって唯一の神の救いの豊かさの鏡たりえるなら、わたしたちは、旧約の詩篇も新約の詩篇も、教会史上のどの詩篇も、排他的に取扱うのではなく、同じ霊のもと皆で保つことができるように思います。わたしたちは、国や世代で言葉も生き方もバラバラになってしまった混乱した時代に生きています。そこにあって、男声・女声・子供の声の多様なハーモニーで、歌うひとつのメロディがあるということは、なんと驚くべきことかと思えます。

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

復活の主の命に結ばれ、ひとつの言霊に結ばれ、腹から、魂から、歌いましょう！

バラバラであったのに主に結ばれてひとつとされたわたしたちが、腹から、心からの讃美を生ける神にささげ、歌いながら永遠の命の道を歩む。人生でこれ以上の肉の楽しみ、霊の喜びはないではありませんか。そうおもって、わたしも恥など忘れて歌ったのです。あと一節、14番の旋律で、韻律詩編の6番を歌ってみたいと思います。ご存じの方は一緒に歌ってください。メロディをご存じでなくとも、霊の風に吹かれた息あるものはこぞって続く祈りに心を合わせ、主の御前にアーメン、真実なりと申し上げます。そして腹の思い、肉の抑揚、喉あるいは魂の深み、心の高まりから、すべてを尽くして共に歌う生に歩み出そうではありませんか。讃美歌14番の旋律で、韻律詩編16の6番を歌い、祈りを捧げましょう。

6. わが魂(たま)、陰府(よみ)に 棄(す)ておかれじ

君は愛児(まなこ)に 墓(はか)を見(み)せじ

満(み)てる喜(よろこ)び 命の道

永遠(とこしえ)にあり 前に、右に

祈祷 感謝／執り成しの祈り

全能の父なる神よ、あなたは天と地とそこにあるすべてのものを作り、これを保ち、支え、くすしい御旨（みむね）をもって導いておられます。またあなたは、今もなお私たちのただ中で大いなる御業を行い、キリスト・イエスの救いにあずからせ、あなたの御元に立ち帰った私たちの魂を、聖霊によって満たして、新しい命の希望のうちに生かしてくださいませ。私たちはいと低きものたちですが、あなたの御業を思い、わたしたちに豊かに確かに注がれている慈しみを思い、御名をほめ、心からの感謝をささげます。

神よ、いま新しい局面にあって、ただ十字架と復活の主にすがり、霊の導きをもとめて祈り歌いつつ歩み出した私たちの群れを、顧みてください。あなた以外のものに、とくに恐れ

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

と不安、不満と高慢に支配されることなく、あなたの御子の救いの真理を常に私たちの目の前に覚えて歩むことをえさせてください。

私たちと同じ困難に直面している近隣の諸教会を、そして全世界にあるあなたの教会の歩みを導いてください。とりわけ日常の生活を奪われた中でささげられる礼拝を、あなたが祝福して下さいますように。主の体なる教会を励まし、あなたが負いやしくして下さるそれぞれの軛を、確かに担うことができますように。あなたの福音をすべての人々に、とりわけ不安のただ中にいる人々に、宣（の）べ伝えさせてください。悲しむ者とともに悲しむ仕え人を、働き人をお遣わし下さい。

主よ、あなたは、私たちすべての者の必要をご存知であり、それを完全に満たして下さるお方です。心身の病に苦しむもの、とくに入院中の姉妹たちを顧み、励まし、支えて下さい。愛するものを失い悲しむ者、多くの悩みのうちにたたずんでいる者みなを慰めてください。貧しさの中で叫ぶ者、飢え渴いて求めるものを満たしてください。争いの渦に巻き込まれているもの、見えない敵と戦う医療従事者、ゆえなく囚われている者、圧迫されている者、災害後の痛みを負い続けている者を自由にしてください。重責を担っている者、とくに、国々の代表者、人を裁く立場にある者、こどもたちに教えるつとめをになっている者、宗教者、人の上に立っている者が、あなたに対し、真理に対するおそれをもって、事にあたることができますように。新しい歩を始めようとしている子どもたち、若者たちの成長を見守ってください。年をかさねた者たちをはじめ、すべての者を、あなたにある平安のうちに憩わせてください。

どうか私たちを御手の導きの内においてくださり、今日からはじまるこの一週をあなたにささげ、それぞれの生活の場、それぞれ遣わされた場所であなたに仕える者として歩ませてください。そのうえですべてを、あなたの栄光のもとに照らし、御国の完成に役立ててください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

信仰告白

——使徒信条によって、私たちの信仰を言い表しましょう。

「我は、天地の創造主（つくりぬし）、全能の父なる神を信ず。

我は、その独り子、我らの主イエス・キリストを信ず。

礼拝式文・説教 「主の霊と命に結ばれて共に歌う」

主は、聖霊によりてみごもられ、処女（おとめ）マリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦難（くるしみ）を受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府（よみ）にくんだり、三日目に死者の内より復活し、天にのぼりて全能の父なる神の右に坐し給ふ、かしこより来たりて、生ける者と死にたる者とを審き給はん。

我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、体の復活、永遠の生命を信ず。アーメン。」

奉獻と祈祷

——主の恵みに対する私たちの感謝と献身のしるしとして、献げものを献げましょう。

主の祈り

——（「献金の祈り」に続いて声を合わせて）

「天にまします我らの父よ、願わくは、み名をあげさせたまえ。み国をきたらせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用のかてを、今日も与えたまえ。我らに罪を犯す者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄とは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。」

頌栄 539

——頌栄539番を歌い、主の栄光の御名を讃えましょう。

「あめつちこぞりて かしこみたたえよ、みめぐみあふるる 父、み子、みたまを。
アーメン。」

派遣と祝福

「平安のうちに行きなさい。希望と喜びのうちに主に仕え、すべての人に愛を伝えなさい。主イエスは世の終わりまであなたがたと共におられます。」

「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし／あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて／あなたに平安を賜るように。アーメン。」

——以上で礼拝を終わります。報告：「小会だより」をご覧ください。

日々の祈り 「食前の感謝の祈り」

教会による「日々の祈り」。今回は、玉山美保子長老が、「食前の感謝の祈り」として整えてくださいました。合わせて朝ごとに「主の祈り」を祈りましょう。新たなる命の希望をもって御名をほめ讃え、祈りに祈りを重ねましょう。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神よ。

いま、あなたが与えてくださった恵みの食卓を前に、罪を告白し、赦しを求めて感謝の祈りをおささげいたします。まことにあなたはわたしたちのために愛する御子を救い主としてお遣わしくださり、十字架の死によって私たちが罪より贖い、御前に生きるものとしてくださいました。神の救いの恵みにあずかって歩むものとしてくださいましたことを感謝いたします。神さまは世界をおつくりになった時、人間が つくり主なる神さまに対して正しく仕え、神さまのみこころに従って、世界のすべてのものを秩序正しく取り扱っていくようにお命じになりました。しかしわたしたち人間は神さまの呼びかけに耳をふさぎ、神さまに背を向け、あなたを仰ぎみることをしませんでした。わたしたちはここに罪を告白し、今、このときいっそうの悔い改めの時がわたしたちに迫り求められていることを確信します。今、世界は、コロナウイルス感染拡大という非常事態に、かつて経験したことのない困惑と不安と恐怖を抱きつつ、大きな試練の只中に生きています。国や文化や人種の差異を超えてこれほど深く苦しみや悲しみを共有したことはありません。

「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らずわたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはないとあなたを憐れむ主は言われる。」（イザヤ書 54・10）

わたしたちを取り巻く環境が以前と全く変えられてしまった状況の中、いつまでこのままの状態で放っておかれるのですかという不平や不満が充満する信仰の薄い私どもに対し、わたしはあなたと共にあり、あなたはわたしと共にあるのだと聖書は告げています。

どうか主よ。受けた恵みに対するふさわしい応答ができるものとさせてください。唯一のまことの神に向かってだけ心から請い求め、自分の困窮と悲惨とを深く悟り、神の尊厳の前にへりくだるものとさせてください。わたしたちがたえず目を覚まして祈り、わたしたちの祈りを主が確かに聞き入れようとしてくださるという揺るがない確信を持って食前の祈りにつくことができますようにさせてください。

「こどもの居場所づくり@府中」のため食材配布会の会場として当教会が用いられたことを感謝いたします。どうか医療従事者の方々がきちんと食事の席に着くことができますように。世界中の飢え渴く人々、特に子どもたちが食の恵みの糧にあずかることができますように。病床にある、愛する姉妹にあなたの励ましとかえりみをお与えください。

すべてをあなたに委ねてこの言い尽くしません感謝と願いを主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

アーメン